

大見村の地域資源

—京都市北部における無住化集落再生活動（その1）—

正会員 ○本間智希*
正会員 山口純**
正会員 松崎篤洋**
正会員 川勝真一***
正会員 北雄介****

無住化集落 再生活動 環境資源
廃村 民家 大見

1 はじめに

日本では今後の少子化による人口減少の結果、都市部に人口が集中することが予期されている。近年のコンパクトシティ化への取り組みはこの動きを加速させるだろう。こうして地方には過疎集落のみならず無住化集落が多数生じることになる。この対策は各地で進められているものの、地方において行政の提供するインフラやサービスの多くは経済成長を前提として構築されてきたために、今後それらを維持することは困難となるだろう。

しかし視点を変えれば、無住化集落は、市民が中心となって新しいライフスタイルを探究するフロンティアとなる可能性を持っている。

2 研究の目的と方法

本論は、京都市左京区大原大見町（以下「大見村」）という無住化集落の再生の取組みについて研究する。大見村は京都市の市街地から約 30 キロ北にある山間部の集落である。1973年に集団離村し、無住化集落となった。

本論では、大見村の歴史と地域資源を明らかにする。研究の方法としてアクションリサーチを採用している。筆者らは、この無住化集落を再生させる「大見新村プロジェクト」として活動している。そこで本研究は大見村の再生活動を推し進めるための、多様な知見を得ることを目的としている。

3 本研究の位置づけ

集落の無住化の過程について坂口の先行研究がある¹⁾。特に坂口は大見村の廃村化の過程についても、集団離村の直後の 1975 年に詳細な研究を残している²⁾。日本の消滅集落の地理的分布や無住化過程の一般的傾向を扱ったマクロな研究としては金木のものがある³⁾。無住化集落の再生に関わる研究として、林らによる無住化集落における土地利用活動の研究がある^{4),5)}。

本研究は無住化集落再生活動の研究として先駆的なものである。本研究は無住化集落の再生を単なる土地利用の問題にとどまらずに、都市部と山間部にまたがるコミュニティの形成の問題として扱う。

その1)では大見村の歴史と地域資源を明らかにする。その2)では、大見新村プロジェクトの発足と活動の経

緯とともに、無住化集落における再生プロジェクトの主体形成に関して論じる。その3)では、大見新村プロジェクトの活動そのものを、無住化集落の可能性を探究するアクションリサーチとしてみなし、そのアクションリサーチのあり方を、アクターネットワーク理論を通じて明らかにする。

4 大見村の環境資源

4.1 地勢

大見村は標高 610m の盆地に位置し、皆子山 (972m) をはじめとした山々に囲まれている。京都市街地から車で一時間程度の距離に位置し、市街地に比べて約 5 度気温が低く、冬期には 1~2m の積雪があり、都市近郊の中山間地域である。

4.2 鯖街道

古来より若狭と京都を結ぶ若狭街道（メディアなどでは「鯖街道」と呼称される）のルートの中でも、大見村は最も古い「針畑越」と呼ばれるルート沿いに位置する。大見村のかつての主な産業は製炭業であり、大見で生産された炭が花背峠を越えて鞍馬へ運ばれ、良質な「鞍馬炭」として京都市中に卸されていた⁶⁾。

4.3 民家形式

大見には現在、11 軒の家屋が現存している。そのうち伝統的民家は 5 軒であり、トタンで覆われているが茅葺き屋根を持っている。これらの多くが、妻入で「おもて」と「だいどこ」が喰違いで配置される「北山型」の民家形式に類似する特徴が伺える⁷⁾。現在唯一の住民である F の居住する民家で実測調査を行った (図 1,2)。F 家は、建築年代が判明する資料がなく来歴は不明であるが、200 年以上前に



図1 F家住宅外観

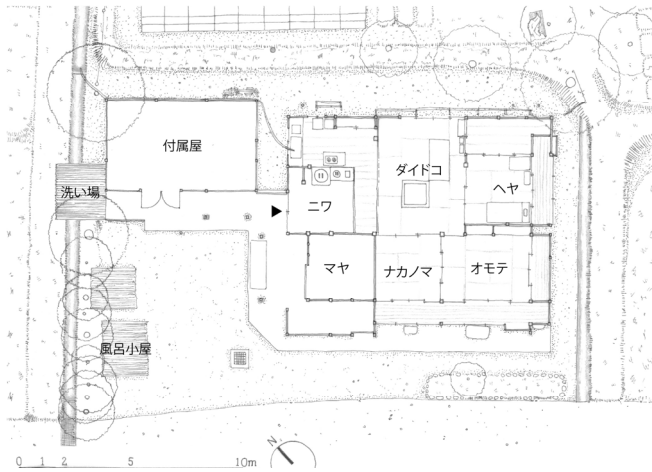


図2 F家の平面図

若狭から来た大工が建てたと言われている。

4.4 安曇川とシコブチ信仰

琵琶湖に注ぐ最も流量の多い川である安曇川の源流の一つ、大見川が集落の中を流れている。安曇川では古来より伐採した木材を筏に組んで琵琶湖へ運搬する筏流しがおこなわれており、筏流しの安全を祈願するために「シコブチ様」が信仰された。このような「シコブチ神社」が安曇川水系一帯に十数カ所祀られている。安曇川水系に固有の民間信仰である。大見村には境内の社殿前を大見川が横断する「大見思子淵神社」が祀られ、奥宮としての面影を残していると言われている⁸⁾。

5 大見村の歴史

5.1 近江との繋がり

大見の名は平治元（1159）年の前太政大臣家政所下文案（高松宮家文書）に久多・針幡とともに「大見田伍町」とみえ、法成寺領から大悲山寺（峯定寺）領としたと記されている⁹⁾。鎌倉時代には足利家領、室町時代には醍醐寺三宝院領となっている。1572年から明治になるまで近江の朽木氏領となった。明治17（1884）年に京都府愛宕郡大原村と合併するが、明治末期までは近江との人的・文化的交流の影響が強かったと言われている。1949年に左京区に編入された。

5.2 集団離村に至るまで

1935年まで自動車を通れる道が通っておらず、電気が1953年、通信環境が1959年に整備された。ただし、上下水道は未整備のままで、ほとんどの住戸がポンプによる汲み上げ式で飲み水をまかなっていた¹⁰⁾。

大見村は製炭を生業とし、稲作等の農業は自給程度のものであった。60年頃の石油燃料の普及によって製炭業が行き詰まり、1973年に集団離村した²⁾。他に冬期の積雪の多さや、高校通学の難しさが離村の原因となった。

5.3 公園開発と反対運動

大見を含む左京区北部の山間地域は市域に編入された後も、長らく放置された状態であった。市による北部地域の位置づけが出来たのは1969年に発表された「まちづくり構想—20年後の京都」であったとされる。ここで北部地域は市民のレクリエーション地域として位置づけられ、その後もこの位置づけは維持されている。1980年に発表された「京都市北部周辺地域整備構想（案）（拠点整備の指針）」において、大見地域における128ヘクタールに及ぶ大規模な公園整備計画が発表された。1500万立方メートルの土砂の盛り土を用いるものであり、京都市の地下鉄掘削時に排出される残土の利用が想定された¹⁰⁾。

この公園整備計画による大見地域における自然破壊として大見川を通じた安曇川の水質汚染の可能性に対する懸念から反対運動が巻き起こった。公園整備計画は、今日に至るまで実行されてはいないが、小規模化しつつ保持されている。大見村の土地の多くがこの計画のために買収された市有地となっているが、計画予定のまま実質的には未利用地となっている土地は、不法投棄の温床となるなど問題視されている。

6 結論

以上考察したように、無住化した大見村は、中山間地域の山村でありながらも、つねに周辺地域や都市部との関係性のなかで持続性を保ってきた地域であると言える。

注

注 1) 無住化集落に類似する概念として「廃村」と「消滅集落」がある。廃村は一般的であいまいな概念であり、何をもって廃村と呼ぶのかについては議論が分かれる。一方で消滅集落と無住化集落は住民が0の集落のことであり定義が分かりやすい。しかし消滅集落の概念については、より厳しい基準を設けて、建物が存在する場合は消滅と見なさないという見方もある。大見村は建物が存在しているのでこの意味では消滅集落ではないが、集団離村の後、前述のF氏の移住までの間は無住化集落であった。

参考文献

- 1) 坂口慶治：廃村(Wustung)の研究，人文地理 20(6)，645-661，1968
- 2) 坂口慶治：京都市近郊山地における廃村化の機構と要因，人文地理 27(6)，579-610，1975
- 3) 金木健：消滅集落の分布について：戦後日本における消滅集落発生過程に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集 (566)，25-32，2003
- 4) 林哲久，田口太郎：戦後から現在における消滅集落数と無住化集落の土地利用の現況—新潟県中越地区小千谷市内の無住化集落を事例として，日本建築学会北陸支部研究報告集 (52)，389-392，2009
- 5) 林哲久，田口太郎，福留 邦洋：無住化集落における転出者の土地利用活動：新潟県小千谷市十二平集落と「十二平を守る会」を対象として，日本建築学会大会学術講演梗概集 2009，579-580，2009
- 6) 朽木村史編さん委員会編集：朽木村史，高島市発行，2009
- 7) 京都府教育委員会：京都府の民家 調査報告 第七冊 —昭和48年度京都府民家緊急調査報告—，1975
- 8) 井上頼寿：京都古習志，臨川書店，1988
- 9) 林屋辰三郎編：京都市の地名，平凡社，1979
- 10) 京都市弁護士会・同公害対策委員会：京都市北部周辺地域整備計画（大見総合公園計画）に関する調査報告書，1982

*RAD -Research for Architectural Domain-

**立命館大学

***京都工芸繊維大学

****京都大学

* RAD -Research for Architectural Domain-

** Ritsumeikan University

*** Kyoto Institute of Technology

**** Kyoto University